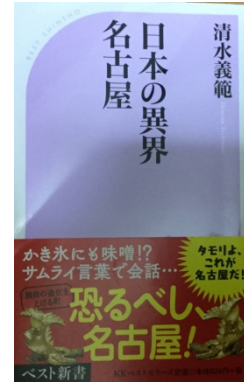


日本の異界 名古屋

写真は今年7月刊行のベスト新書。1986年『蕎麦ときしめん』から続く、清水義範らしい「名古屋本」。関心あるテーマなので、表紙カバー裏、「はじめに」「おわりに」の一部だけでも紹介したい。



名古屋人は、東京や大阪のことをどう思っているのでしょうか。東京に対してはある種の劣等感を抱いている。だがそれは、だから東京に住みたい、という思いとはまるで別のものだ。東京は人と人との間につながりがなく、やむなくいるところだと思っている。名古屋人は、知り合いの群れの中に生きている。だから心が安まるのであり、名古屋が一番住みやすい街だと思っているのだ。では、大阪についてはどう思っているのか。名古屋人は大阪をちゃんと見ようとはしない。ヘンなところだよなあと、むしろ避けたいような気になる。というわけで、名古屋人にとって大阪はどうでもいいのである。

名古屋がまたしても、全国の笑いものになるようなことをしてくれた。なんと名古屋市自身が大々的な都市の魅力の調査をして、名古屋市は行きたくない街のナンバーワン、という結果を発表したのだからあきれてしまう。名古屋が他の地方の人たちから見て魅力のない都市であるのは、当然のことなのだとは私は思っている。なぜなら、名古屋の人に、名古屋はいいところだと外に向かってアピールする気がまるでないからだ。だから当然のことながら、名古屋の魅力は誰にも知られることがないのだ。私には、名古屋の魅力度が最下位だというのが納得できてしまうのである。

というわけで、“日本の異界、名古屋はこの先どうなっていけばいいのか。このままでいいのだ、が私の答えである。変えなきゃいけない不都合な点の一つもないのだから。他の地方の人が訪問したくない街ナンバーワン1に選んでいるとは言っても、名古屋が、来てほしくないと思っているのだから、なんの痛痒もないのである。名古屋は名古屋人だけで、本音丸出しで、ツレと助けあって、得するようにぬくぬくと生活していて、この上なく居心地がいいのだ。生きやすいところだというのは最大の魅力ではないか。

名古屋には変わってほしくない、と願うのである。これまで通り名古屋だけで自立して、自分たちだけの快適さを求めて、閉鎖的に、独自性を守っておかしな都市であってほしい。超然と胸を張って、偉大なる田舎であってほしいのである。偉大なる田舎は、偉大なる普通であることであり、偉大なるまともであるってことでもあるのだ。つまり名古屋はまともなのだ。日本というのはそもそも名古屋的であるのだ。そういう偉大さを名古屋は捨ててはいけないと思う。名古屋が名古屋的である限り、名古屋は“異界、”として繁栄していくのである。この先もずっと名古屋には平気でまともである“異界、”であってほしい。

(2017年11月17日)